

48時間以上経口挿管下人工呼吸管理患者における

抜管後誤嚥性肺炎発症の予測因子の検証

【筆頭著者】

井上拓保^{1,2)}

【共同著者】

宮川哲夫^{1,3)}，田代尚範^{2,3)}，川手信行⁴⁾，林宗貴⁵⁾

【所属】

1) 昭和大学大学院保健医療学研究科博士後期課程保健医療学専攻

内部障害リハビリテーション領域

2) 昭和大学藤が丘病院リハビリテーション室

3) 昭和大学保健医療学部理学療法学科

4) 昭和大学医学部リハビリテーション医学講座

5) 昭和大学医学部救急災害医学講座

論文要旨（200-300 字）

本研究は抜管後誤嚥性肺炎（PAP；Post-extubation Aspiration Pneumonia）発症の予測因子を検証した。48 時間以上経口挿管下人工呼吸管理された患者を診療録から後方視的に 36 例抽出し，抜管後 PAP 発症群 11 例と PAP 非発症群 25 例の 2 群に分類し統計学的に解析した。PAP 発症率は 30.6%，予測因子は改訂水飲み試験（偏回帰係数-3.588， $p<0.05$ ，オッズ比 1.028，95%信頼区間 1.001-1.049）でカットオフ値は 2 点であった（感度 64%，特異度 88%）。経口摂取開始基準とするには改訂水飲み試験だけではなく，包括的な嚥下スクリーニング検査が必要である。

字数：294 字